

* * *

万年青年、山崎一穎先生

文学部人文学科教授・副学長 山田徹雄

跡見学園の『二三〇年史』には、以下の記述がある。

「昭和五十三年十月に、……大学は本格的な改革の時代を迎えようとしていた。」
「その象徴的な出来事が、若き山崎一穎学長の選任である。」
「昭和五十三年十月二十二日、四〇歳になったばかりの、全国一若い学長が誕生したのである。」

（典拠）跡見学園二三〇年史編集委員会『跡見学園——二三〇年の伝統と創造』平成十七年、二〇三ページ

山崎先生が最初に学長に就いたとき、学長選挙が行なわれた時点では、三九歳の若さであった。教職員組合の書記長からの転進であり、ワレサ氏（自主管理労組「連帯」議長↓大統領）同様に、

労組からトップの座に就いた。

山崎先生が、学長に就任なさった直後（昭和五十四年四月一日）に跡見学園女子大学に就職した私にとって、山崎一穎先生は常に「跡見学園女子大学のトップ・マネジメント」であり、「偉大な学長」であった。教育者としての先生は学生に何を求めていたのであろうか？

山崎先生は、昭和五十五年の入学式訓示において、

「自ら考え、判断し、行動できる自立した人間を創る練成の場が〈大学〉なのです。」

「主体的要素をもって学ぶ人間に成長してほしいと思います。」

「学問を磨き人生を語り合う仲間を発見し、人間的信頼の下で生きる新しい生活原理を獲得することを切望します。」
と説いている。^{〔1〕}

自立、主体性、人に対する思いやりは「教育者山崎」が、常に学生に求めていた原理であった。昭和六十年の入学式訓示では、これをもっと簡潔に

「学問を通して主体的に考え、行動し、判断できる自立の人間になつてほしいと望んでおります。」

それに加えて

「他人の痛みがわかる人間になってほしいと希望します。」と語っている。⁽²⁾

この自立という思考原理は、大学経営においても貫かれていた。昭和五十八年、学長再任にあたって、

「再任にあたって、〈自立する大学〉を目標に掲げた。人間が成長する如く、大学も生きて成長しなければならない。」

ことを強調し、

「学生が学費納入することの意味は、大学へ投資することである。施設設備とカリキュラムを購入するのである。少なくとも投資額と等価な還元がなされなければならない。」

ことを教職員に訴えた。⁽³⁾

「山崎改革」の原点は、「等価交換の経済法則」に見出されるのであり、大学とはサービス業であるという確信であった。

氏は、文学者には稀有なことに現実社会の認識においても傑出していた。平成十八年三月、卒業生を送るにあたり、社会が複雑かつ矛盾に満ちていることを前置きして、

「このような社会に出てゆくためには、決意と覚悟が必要です。

……私はみなさんに「毅然として社会に立つ」という気概で学舎を去ってほしいと思います。」

「毅然として社会に立つためには、革新的でなければなりません。」

「(人生という) 物語を豊にするのもあなた。貧しくするのもあなた。要は毅然として人生に向き合うことが必要です。」

と論じた。⁽⁴⁾

学生、教職員に多くの影響力をもった名言を投げかけてきた山崎語録にもうひとつ、Web上でみることが出来る名言を加えたい。

「人生という道に夢は落ちていない。夢は自らが創り出すものである。夢見る少女であってはならない。夢を創り、その実現に向かって走りたい。」⁽⁵⁾

万年青年山崎一穎の面目躍如である。

職場の上司として、私の目で見た先生は、次のようにまとめることができる。

(1) 名譽、地位、世評に惑わされず、自分が必要とされる仕事を引き受ける。

昭和五十三年から平成元年に学長職を務めた後、平成二年から入試広報部長を引受け、平成十四年から平成十八年まで再び学

長職を経験した後に、中学校高等学校校長職に就いた。世間の常識では、降格とも思える人事であっても、自身が必要とされればそれを引き受ける。

(2) 学内における行政職を務めながら、森鷗外に関する超一流の研究を行い、かつ、日本近代文学会常任理事、全国大学国語国文学会理事、森鷗外記念館常任理事等の学会活動・社会活動を積極的にこなすなど、先生の活動は枚挙に暇がない。森鷗外は二足のわらじを履いていたが、山崎先生は三足、四足もわらじを履く驚異的なバイタリティーを持ち続けている。

(3) 圧巻であったのは、教授会議長としての学長山崎先生であった。教授会において、「理論整然と間違った発言」があれば、これを論し、構成員の不满を十分に聴取した上で決断を下す。説得は似非論理であっても、理屈を超えた心に響く話術を展開する稀に見る能力をお持ちであった。

私たちは、山崎先生に対する信頼感を持っていたために、多少強引と思われることでも、これを認めたのであった。なによりも、

教職員全員に対して、公平に振舞っていること、思いやりを持っていることが分かっていたからである。

頭でっかちではない、実践化としての学者であり、かつ行政者であった。大学の学長ではなく、他の業界においてもトップに上り詰める人材であった。ご自身と考え方、行動が異なった者でも、その人の能力を認めれば登用するところの広さをお持ちである。

「うるさいやつは悪さをしないように(執行部に)取り込んでしまおう」(山崎)と聞かされたとき、素直に笑っていた私は、はたと気付いた。私も「悪いやつ」であろうかと。

注

(1) 「入学式訓示(昭和五十五年四月三日)」「跡見学園女子大学学报」創刊号(昭和五十五年)

(2) 「入学生に贈ることは(第二十一回入学式訓示)」「跡見学園女子大学学报」第一号(昭和六十年)

(3) 「自立する大学をめざして——再任にあたっての基本方針——」「跡見学園女子大学学报」第六号(昭和五十八年)

(4) 「卒業生を送る——毅然として社会に立つ」「跡見学園女子大学学报」第五七号(平成十八年)

(5) 「山崎一穎の名言・格言」「世界の名言・癒しの言葉・ジョーク」, 3
interrete sub: <http://becom-net.com/wise/yamazakikazuhide.shtml>
(ダウンロード、二〇〇八年十二月二十四日)